

# 学校と地域の連携における学習の諸相 —「実践コミュニティ」への参加による効果—

宮地 孝宜  
(日本女子大学)

## 【要旨】

学校と地域の連携を安定的に行うには、連携を効果的に行うことができる組織を構築することが重要であるといわれている。本研究は、連携を担当する教員に着目し、実践への参加の実態、とくに担当者の学習のプロセスに焦点を当て、連携を効果的に行うための方策について、「実践コミュニティ」の概念を用い、検討した。さらに、生徒や地域住民の連携事業への参加の影響について検討した。検討の結果、組織の継続性を確保するための担当者の配置方法など、連携を効果的に行うための知見を見出すことができた。また、体験に参加した生徒や生徒を受入れた地域住民の「実践コミュニティ」への参加が、地域社会のネットワーク形成に寄与するなどの影響を示した。

## 1. 研究の目的

現在、学校と地域の連携は不可欠なものとなっており、各地で様々な実践が行われ、多くの成果があがっている。さらに近年は、学校と地域の連携を円滑に推進するために、地域教育コーディネーターの設置や社会教育主事有資格教員の配置、各学校における地域との連携を担当する校務分掌の設置など、各地で様々な施策が講じられている。

筆者は日本生涯教育学会第28回大会において、学校と連携する地域組織間の「境界」の実態を明らかにすることを通して、学校と地域の連携を円滑に遂行するための方策を探ることを試みた。発表では、組織の内部と外部との境界関係の担当者である「境界人」の重要性や「境界人」による「緩衝」と「橋渡」などの働きの有効性を示すとともに、境界へのある程度の権限の委譲の必要性、境界人に求められる資質、境界関係の担当者の専従化、効果的な組織構築の方策について提案した。当該研究において実施したヒアリング調査では、地域との連携を担当する教員が人事異動等により交代した場合の連携事業の停滞をいかに回避するかということが課題の1つとして浮かび上がっていた。

学校と地域の連携を安定的に行うには、連携を効果的に行える組織を構築することが求められるが、特に、連携を担当する教員の役割は大きいといえる。

よって、本研究では、引き続き、連携を担当する教員に着目し、実践への参加の実態、とくに担当者の学習のプロセスに焦点を当て、上記課題（組織の継続性確保など）を解決するための方策の検討を試みる。また、併せて、生徒や地域住民の連携事業への参加に焦点をあて、実践活動における学習の影響について検討したい。

## 2. 研究の方法

研究の目的を達成するため、以下の調査を実施した。

### (1) 学校と地域の連携事業における学校側の担当者の活動の実態調査。

① 発表者自身の実践活動への参加による情報収集

② 学校側の連携担当者へのヒアリング調査

### (2) 学校と地域の連携事業における学習（無意図的学習）について、その諸相を把握し、実践活動の影響を検討するための調査。

① 発表者自身の実践活動への参加による情報収集

② 生徒および地域住民へのヒアリング調査

## 3. 事例の概要と課題

本研究は、公立中学校と地域の連携として、「臨港中学校」と連携しながら、「川崎市立臨港中学校区地域教育会議」が中心となって運営、実施している「夏休み体験学習」に注目する。川崎市の地域教育会議は、地域住民、地域団体、学校、行政機関等で組織された官設民営型、地域住民参加型の地域教育のためのネットワーク組織（行政からは若干の運営費が支出される）で、市内の行政区、中学校区すべてに設置されている。臨港中学校区地域教育会議は1998年に発足し、「地域で子どもを育む」「住民の生涯学習を活発に」の2つの目的を掲げ、活動している。委員は、町内会、団体の代表、学校関係者、行政機関、住民委員で構成され、会議の事業は生徒の「夏休み体験学習」のほか、中学校のオープン教室、子ども110番、子ども会議、音楽会、地区懇談会、広報誌の発行などがある。

「夏休み体験学習」は1999年から毎年夏休みに実施され、福祉施設でのボランティア体験や各事業体での勤労体験の2つの体験学習、生徒の地域参加を促進すべく、町内会のおみこし担ぎ、盆踊り大会での「ソーラン節」披露（2002年度から）などの機会を生徒に提供している。

運営は、地域教育会議の事務局、教師、地域教育会議メンバー、卒業生（高校生、大学生など）、外部協力者などによる企画担当者会議で行っている。参加者（参加は生徒の意志による自由参加。例年、全生徒の7割程度が参加）の募集、オリエンテーションや調整など、地域教育会議が中心となり学校と連携をとりながら進めている。夏休み期間中は校長室を開放し、生徒の体験後のフォロー（体験後、生徒が振り返りアンケート記入のため来校。体験の振り返りを支援）を行っている。また、体験の現場を地域教育会議や教師が訪ね、生徒を励ますなどの活動もしている。2003年度からは、生徒の中から実行委員を募り、受け入れ先に事前に関係書類を持って挨拶に行くなど、事業そのものへの生徒の参画の度合いは年を重ねる毎に増加している。

この事業は、元臨港中学校教諭 A 教諭（理科を担当する40歳代の中堅男性教諭。2007年度に他校に異動）と地域教育会議の事務局長である B 氏（PTA 会長等を務めるなど以前から地域において精力的に活動してきた現在60歳代前半の男性。地域教育会議では住民委員として選出され、同会議の事務局長でもある）が中心となって進めてきた。

A 教諭は、2002年度から校務分掌として、地域教育会議の担当となり、異動するまでの4年間はクラス担任を持たず、実質的に地域との連携に関わった。校務分掌として関わる

2002年までは、1999年のおみこし担ぎに、当時、顧問をしていた部活の部員を派遣するなど協力をしたが、「関われることは関わるが、傍観者という感じだった」ということであった。

A 教諭は、臨港中学校の教諭として、中学校と地域教育会議との「境界」に位置し、両組織の連携の鍵を握る活動をしていた。その活動は、filtering (濾過する、好ましいものを通す)、protecting (防御する、保護する)、buffering (緩和する、緩衝する)、representing (代表する)、transacting (交渉する、取引する) などであったが、特に、外部 (地域教育会議) からの要請や依頼等の影響を和らげつつ、組織 (学校) 内部へそれらをうまく伝えていた<sup>1)</sup>。

連携において、こうした役割を持つ学校内部の担当者は重要なポジションであるといえる。ただし、一般に、こうした役割を遂行する担当者も、数年単位で人事異動により学校を去ってしまう。円滑な連携をいかに継続するかは実践上の課題であるとともに、研究上の課題といえよう。本事例も同様の課題を抱えており、いかにして安定して事業を継続するか、安定した学校と地域の関係を保つかということとは大きな課題となっていた。

#### 4. 連携における学習の諸相

本研究は、連携担当者の活動の実態、とくに担当者の学習に焦点を当て、連携における課題 (組織の継続性確保) を解決するための方策の検討を第1の目的としている。つまり、学習の効果により、連携が円滑になる要因を探るものである。

まず、本研究における学習の位置づけについてであるが、正統的周辺参加論を援用し、学習を「実践コミュニティ」への参加のプロセスとして捉え、そこで生起する「無意図的」な学習に注目する。

ここでいう「実践コミュニティ」とは、「あるテーマに関する関心や問題、熱意などを共有し、その分野の知識や技能を、持続可能な相互交流を通じて深めていく集団」と定義されている。また、「実践コミュニティはどこにでもある。だれもが職場や学校、家庭や趣味などを通じて、いくつかの実践コミュニティに属している」とされる。さらに、「実践コミュニティ」は、名前のあるもの、無いもの、その存在が分かりやすいもの、分かりにくいもの、中心メンバーとして参加するもの、時折参加するものなど、その形態は様々であるという<sup>2)</sup>。

「正統的周辺参加」とは、一言で言えば、「実践コミュニティ」の一員として活動へ参加することによって、「実践コミュニティ」における周边的な参加から、次第に中心的活動に関与するようになるプロセスをさす<sup>3)</sup>。

つまり、学校と地域の連携事業である「夏休み体験学習」の運営に関わる人々、参加する生徒、体験を受入れる地域住民で形成されたコミュニティを、1つの「実践コミュニティ」として捉え、そこに参加する生徒、それを支える教職員や地域住民を「実践コミュニティ」への参加者として捉えるということである。

以上のことから「夏休み体験学習」の構図を描くと図1のようになる<sup>4)</sup>。

学校 (学校制度、そこに形成された教員文化) は、地域社会を成立基盤にしているが、両者の乖離や齟齬の指摘があることから、本研究では、あえて対立的な図を描いている。

さらに、「実践コミュニティ」への参加によって、学校と地域社会の関係がいかに変化するかということについても検討すべき課題の1つである。

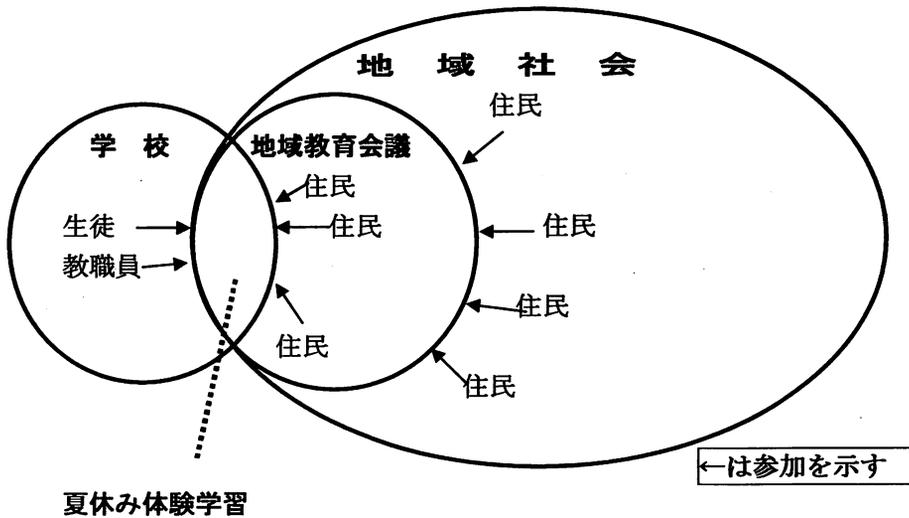


図1. 「夏休み体験学習」の構図

#### (1) 教員の参加

学校と地域との効果的な連携を推進するには、担当者を含めた組織的な運営体制をいかに継続していくかということが重要課題である。特に、数年ごとに教員の人事異動がある学校においては、いかに事業を引き継ぐかが重要なポイントになるが、この点についても本事例から1つの示唆を得ることができる。

本事例では、2006年度にこれまでB氏と共に学校側の中心的な担当者として「夏休み体験学習」に取り組んできたA教諭が他校に異動したが、2006年度以降も比較的安定した運営が行われた。

その理由を探るために、連携事業における学校側の関係者であるA教諭の後を引き継ぎ、連携事業を担当したC教諭（男性、当時50歳代後半の数学科教員）への面接によるヒアリング調査（2008年5月、A教諭も同席）を実施した。なお、A教諭にはその後も当時の様子について、電話等によるヒアリングを継続的に実施している。

C教諭は、2003年度、A教諭の「夏休み体験学習」に関わる多忙ぶりを目の当たりし、「コンピュータの入力など、何かできることがあれば手伝いますよ。」とインフォーマルな形で声をかけた。

この頃をA教諭は「(教職員が)子どもたちが良くなる実感、なんとなくですけど、落ちついてきたり、いい影響を感じた。」「共感ですよ。」「ものすごく共感を示したのがC先生」と振り返っている。このことが、C教諭が地域教育会議および「夏休み体験学習」に参加するきっかけとなった。

同年度は校務分掌としては地域教育会議の担当と位置づけられていなかったが、C教諭の関わることのできる範囲で協力していたという。

2004年度、2005年度はA教諭を補佐する立場として、校務分掌においても「夏休み体験学習」を担当することとなった。2006年度からはA教諭の他校への異動に伴い、C教諭が主な担当者となった（図2）。

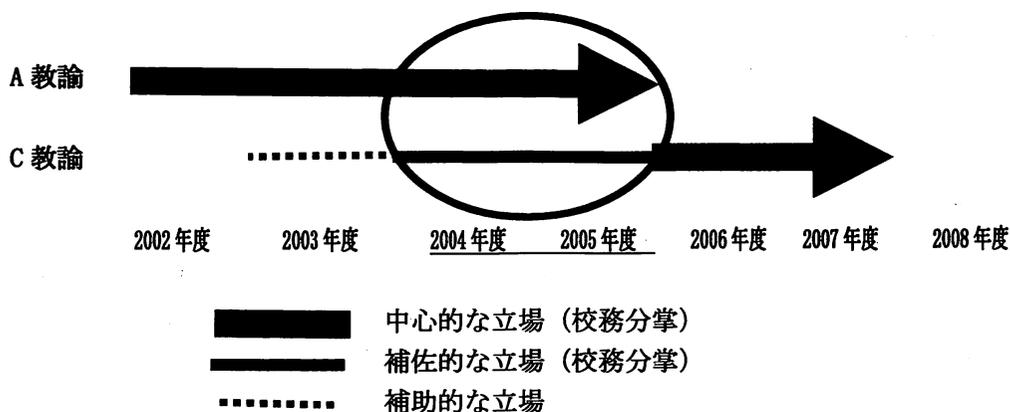


図2. 「夏休み体験学習」学校側の担当者

C教諭は、当初は多忙なA教諭をサポートするために、自ら率先して「夏休み体験学習」に関わる仕事に参加するようになったのだが、A教諭と共に事業に関わることによって、「夏休み体験学習」の意義を自ら看取することによって、事業に、より積極的に関わるようになったという。

この事業は、前述したB氏とA教諭が中心となり、相互に連絡を取り合い、話し合いながら進められていたが（まさに「協働」といえる）、その輪の中にC教諭も入り、打ち合わせや会議を繰り返しながら、事業を進めていった。A教諭は「(C教諭に) 教えよう、育てようというスタンスではなく、Bさんといっしょになって会議をした。」と当時を振り返っている。

そうした、A教諭らとの活動を通して、事業（「夏休み体験学習」）の意義や、事業の進め方や留意すべき点などについて学習していった。これはまさに「正統的周辺参加」ということになる。

また、A教諭は実践の初期の頃を振り返って「おかれた状況から、仕事を通して、変わっていった。」と語っている。ここでいう「状況」とは、B氏を中心にした地域教育会議のメンバー、体験を受け入れてくれる地域住民、参加する生徒などとの活動、つまり、実践そのものである。

事業を効果的に運営するには、組織体制をいかに継続していくかが大きな鍵となる。C教諭は中心的な役割を担う古参者であるA教諭らと共に2年間活動し、当初は新参者として補佐的な立場での参加であったが、徐々に事業の中核に関わるようになり、最終的には、A教諭の異動により、事業の学校側の中心的役割を担うこととなった。

つまり、A教諭らとC教諭が共に活動した2年間こそが、C教諭の学習の場となり、連携のための体制をうまく引き継ぐ大きな要因となったのである。それは、ただ単に、連携の

ための様々な手続きや仕事を覚えるということだけではなく、連携事業の意義、ミッションをより深く理解することにつながっているようである(C教諭のコメントから)。そして、担当者の人事異動がありながらも、継続した運営を遂行することにつながっている。

これらは、校内における担当者の配置(体制づくり)にあたって、十分に留意すべき事柄である。つまり、人事異動による担当者の交代による事業の停滞を防ぐには、常に2名以上の体制をとり、担当者をうまく循環させていくことが方策となるのである。実に当たり前とも思える話ではあるが重要な視点であるといえよう。

## (2) 生徒の参加

次に生徒の参加について検討してみたい。

発表者は2002年7月と9月に当該中学校の生徒に対し、アンケート調査を実施した。調査では、『夏休み体験学習』への参加によって、生徒の地域社会への親しみが増したり、地域に知り合いが増えたりしているなどの結果が示された。『夏休み体験学習』への参加により、生徒は地域社会の一員として変化していることをうかがい知ることができた<sup>5)</sup>。

本研究では、参加した生徒の実態を探るために5名の生徒(すべて3年女子)に対し実施した面接によるヒアリング調査(2003年8月に当該中学校校長室において実施。ヒアリング調査結果については未公表)を基に、「夏休み体験学習」への参加によって、生徒がどのように変化したか、探ってみたい。

調査は、対象者、生徒D、生徒Eはそれぞれ単独で、生徒F、生徒G、生徒Hは3名のグループにより、進路について、地域について、地域行事について、地域行事に参加することによる変化について、地域への要望、地域活動への参加意思、地域貢献の意思などについてヒアリングを行った。以下、ヒアリングの結果の一部を示しながら、それぞれ考察を行いたい。

### ① 地域行事への参加による変化

※ ( ) 内は筆者の発言

**【生徒D】** 知り合いの人が増えた。知り合いが多いと、あいさつしたり、してきてくれたりするし。なんかそういうのうれしい。(安心感みたいなのある?) ある。

**【生徒E】** 知らない人とかも、町内の中ではつきあったりするので、すごく楽しいし、逆にその人のためにもやりたいなと、頑張りたいと思う。  
(体験学習の人とは町でたまたまあったりした?) そしたら、あいさつするくらいですけど。(知らない人とあいさつしづらいからね) はい。

**【生徒H】** 郵便局に働いている人と体験学習を通して話して、いろんなことがわかりました。飲食店のところにも一回いったことあるんですよ。その人たち見た目怖そうだったんですけど、話してみると意外と優しい人たちで。最初、入るときすごい怖くて、だけど会話してみると。

参加した生徒は、「夏休み体験学習」において、受け入れ先の関係者である地域住民と共に活動することにより、「夏休み体験学習」を超えた彼らの日常としての地域社会においても新しい関係性が創出されていることがうかがえる。つまり、「実践コミュニティ」としての「夏休み体験学習」への参加が、この「実践コミュニティ」の存在基盤である地域社会への参加（の意思）を促している。言い換えれば、「夏休み体験学習」は生徒と地域社会の橋渡しの役割となったと考えられよう。

## ②地域への要望、地域活動の参加意思、地域貢献の意思

※（ ）内は筆者の発言

【生徒E】いろいろな行事に積極的に参加したいと思います。

（体験学習の実行委員はやった？）やりました。

（どうやってみて？）あんまり仕事はなかったけど、頼みに行きました。けっこう「わー来てくれたの」みたいな感じでした。

（実行委員って来年も続けて欲しいと思う？）はい。生徒がやないと。

（地域でやってみたいことがあります？）もっと参加できるようにしていきたい。もっと子どもとか生徒とかに頼んで欲しいですね。

（頼んでくれたらやる？）はい。こっちからあんまり考えにくいんで、迷惑になっちゃうかもしれないので。でも頼まれるとします。

（これからも通える範囲だったらこの地域に住んでいたい？）できればこういう風にフレンドリーな地域がいい。

【生徒F、G、H】（こういう地域とのふれあいの機会があったことによって、地域とのかわりは変わってきてるのかな？）うん。

【生徒H】（望むことある？）ないです

（ないということは満足しているってこと？）そうとも言えます。

【生徒G】（実行委員としてお願いしに行っただうだった？）快く受け入れてくれたよね。きてねとか、来るの？とか言われた。

まず、「夏休み体験学習」に参加することにより、地域社会へ参加や地域貢献の意思が芽生え始めていることがうかがえる。さらに、生徒の代表として、実行委員を経験することにより、より積極的に「夏休み体験学習」に関わる「実践コミュニティ」へ参加することへとつながったといえよう。

## ③その他、地域社会についての意見

【生徒E】住んでる人同士でまとまるっていうのは、すごくいいことだと思うんで、大人になってもやりたいと思う。

【生徒 G】いままで体験学習とかがないと、お店の人といろんな会話をしたりとかってないじゃないですか、だから、そういうことができたから、地域がいろいろ分かる。

【生徒 F】地域とふれあえるし、地域の輪が広がるからもっと全国的に広めてもいいと思う。

【生徒 G】楽しいですよ。地域のことも分かるしいっぱいやっていったほうがいいと思います。

上記から、生徒たちは、地域社会の一員としてのアイデンティティを形成しつつあることが見て取れる。

「夏休み体験学習」の記念誌<sup>6)</sup>には、卒業式の答辞で生徒が「地域は私たちにとって、ひとつの大きな家」と語ったと記されている。これは、こうした実践の積み重ねによる、言い換えれば、「実践コミュニティ」への参加による影響、言い換えれば効果であるといえよう。

### (3) 地域住民の参加

最後に、地域住民の参加（体験の受け入れによる）がもたらす効果について、発表者が2003年に「夏休み体験学習」において生徒を受け入れた地域住民に対して行ったヒアリング調査の結果を基に、若干の考察を行いたい<sup>7)</sup>。

#### 【地域住民 I】 小売店の男性

「かなりしっかりしているなと思った。あくまでも接客を通してみるパターンしかわからないんですけど。かなり世間、中学生という見方が世間からの見方が厳しい目で見えますよね。ところがそういう面っていうのは感じられなかったし、すごく進歩的、考えも進んでるなって。ここにいると世間話なんかもけっこうするわけですよ。そういう面から見てかなりしっかりしてるなと思いましたね。」

#### 【地域住民 J】 飲食店の女性

「(生徒に対する) 見方が変わりました。こどもたちは表で会っても声をかけてくれる。卒業式に来てくださいというお手紙をいただいた。すごく親近感がでてきましたね。わたしたちも見ても「あ、何年生だ」と興味を持つようになった。」

また、「夏休み体験学習」の報告会に参加した自動車修理工場の男性は、自分の工場に、生徒を受け入れるまでは、あまり、学校や地域の行事に参加することがなかったが、これを機に、もっと参加をしていきたいと述べた。

体験先として生徒を受け入れた地域住民は、「夏休み体験学習」への参加によって、「実

実践コミュニティ」の成員（参加者）である生徒のありのままの姿を知り、ステレオタイプな中学生像を払拭している。

そして、生徒を受入れた事業者（地域住民）は、その多くが次年度以降も生徒を受け入れる。さらに、年を追うごとに生徒を受入れる事業者は増えてきた<sup>8)</sup>。こうして、地域住民の所属する他のコミュニティへと影響し、徐々にではあるが、「実践コミュニティ」は拡大し続けている。

「重層的に構成されている実践共同体が複雑な仕方で互いを規定し合っており、「学習主体は複数の実践共同体に同時に参加しており、1つの実践共同体への参加の在り方の変化が他の実践共同体への参加の在り方に影響をあたえ、そのため学習主体の参加およびアイデンティティの在り方とその変化も重層的である」<sup>9)</sup>とすれば、「夏休み体験学習」への参加が、そこに参加する人々がそれぞれ別に参加している地域社会に存在する他の「実践コミュニティ」へ参加することにつながり、そのことによって、新たな地域社会のネットワークが形成される、言い換えれば、地域社会のソーシャル・キャピタルが高められると捉えることも可能であろう。

地域社会の崩壊が叫ばれる今日、地域社会を再生するための1つのヒントとなり得るのではないだろうか。さらに、自明的なコミュニティとしての学校への参加の在り方に影響を与えるとも考えられ、学校と地域の関係性へも大きく影響すると考えられよう。

## 5. まとめと今後の課題

本研究は、学校と地域の連携事業である「夏休み体験学習」の運営に関わる人々、参加する生徒、体験を受入れる地域住民で形成されたコミュニティを「実践コミュニティ」として捉え、実態分析を通して、参加（学習）がもたらす効果を中心に、効果的な連携方策や連携事業の効果を探ることを目的とした。

若干ではあるが、連携事業への参加の実態から、連携を効果的に行うための知見を見出すことができた。また、連携事業への生徒や地域住民の参加による影響についても、「実践コミュニティ」の概念を用い、説明することができた。学校、地域社会のあらゆる関係者の「実践コミュニティ」への参加を促すことが、学校と地域の連携を促進し、さらには、地域社会の新しいネットワーク形成につながっていくことになるであろう。

最後に、本研究の課題について言及しておきたい。全体的にはごく序論的な考察に止まっているといわざるを得ない面もある。生徒や地域住民へのヒアリング調査も限定的なものである。今後は、理論の精緻化を行うとともに、他の実践事例についても同様の視点から分析を行うことも必要であると考えている。

### 【注記・引用文献】

- 1) 宮地孝宜「学校と地域組織の連携における「境界」—連携担当者の役割をめぐって—」日本生涯教育学会論集 29 2008 pp. 83-92
- 2) エティエンヌ・ウェンガー他著、野村恭彦監修、櫻井裕子訳「コミュニティ・オブ・プラクティス」翔泳社 2002 pp. 33-35

- 3) ジーン・レイブ、エティエンヌ・ウエンガー 佐伯胖訳「状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—」産業図書 1993 などを参照
- 4) 生徒と教職員、さらに住民の参加は、それぞれ、「夏休み体験学習」での学習者（一部実行委員として運営への参加もあり）、学校における運営者、地域教育会議の運営者および「夏休み体験学習」の受入先と、異なる立場であるが、それぞれを「実践コミュニティ」への参加者と捉え、それぞれの効果や影響を検討するため、図では、参加をすべて同じ次元で描いた。
- 5) 調査結果は、宮地孝宜「地域組織主導の「勤労体験学習」の実践と効果(2)―『夏休み体験学習』に参加した生徒の変化を中心に―」『国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』第4号 2004 pp. 225-232 に掲載されている。同調査は、体験学習に参加した生徒に対し参加前と参加後の2度、質問紙による調査を実施し、以下3点の結果が示された。①生徒自身、地域に顔見知りの大人がより多くいるほうが、地域社会に対して、積極的かつ協同志向的な態度を示す傾向があった。②『夏休み体験学習』への参加によって、地域社会への親しみが増したり、地域に知り合いが増えたりした。③地域組織が実施することの特殊性は見いだせないが、『夏休み体験学習』への参加は、生徒の進路や職業選択・決定においてよい効果を発揮した。しかし、地域との連携事業による効果や影響について詳細に把握することには限界があり、ヒアリング調査などを通して、それらを解明することを課題としていた。
- 6) 川崎市地域教育会議「7年間の地域活動ドキュメント 中学生の夏休み体験」川崎市教育文化研究所 2005 p. 3
- 7) 今回再分析した調査結果は、宮地孝宜「地域組織主導の「勤労体験学習」の実践と効果」『国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要』第3号 2003 pp. 193-200 に掲載されている。調査は、2001年度に生徒を受入れた民間の12事業体の内、協力が得られた7事業体に対して行なった。
- 8) 「夏休み体験学習」実施1年目の1999年の受入先は21カ所である。6年目の2004年には47カ所と倍増している。その間、受入先の都合や生徒の参加姿勢や能力不足により受入を断った事業体も10数箇所あるが、確実に「夏休み体験学習」の「輪」が広がって来ていると言えよう。(前掲書(5)p. 7) また、同書には「最初は地域教育会議に委員として参加している(人が属する)事業体、行きつけの店や知人、友人の伝手でお願いして回ってようやく体験先リストができました、その後は保護者や委員からいろいろ紹介を受けて、生徒の希望も加味しながら年々少しずつ体験先がふえてきました」(括弧内は筆者が追加)と記されている。
- 9) ジーン・レイブ、エティエンヌ・ウエンガー 佐伯胖訳「状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加—」産業図書 1993 ※訳者(佐伯)による注記。pp. 113-114